
XXX小学校でテロ事件

シー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

XXX小学校でテロ事件

【コード】

N2618P

【作者名】

シー

【あらすじ】

開始、余興、犠牲、試練の4話で成り立つ。

開始

時間9：00

不気味な声で校内放送が流れる。

――

――校内放送――

「我々は神の代理人です。神の命を受け君達を試しに来ました。今、この学校に爆弾を仕掛けました。

校舎から人間が一人でも出た場合、その瞬間に爆発します。爆弾が爆発したら、全員が死にます。

また、5時間後の、午後2：00丁度をタイムリミットに爆発します。

爆弾を解除したければ、我々に従ってください。では、我々は命令します。

午後2：00までに、校舎に居る人間を3000人以上にしてください。

外から人が入ることは許しません。

3000人以上にできたら、爆弾を解除します。

それと、もう一つ条件をつけます。

我々を退屈させないために、余興を行っていただきます。詳細は、放送室に行けばわかります。

それから、信用してくれないかもしれないので、試しに運動場を爆発させてみます。

本体の威力は、この1000倍はあると考えてください。」

少年大介編――

僕は、校内放送を聞いていた。

「そんな馬鹿な」という気持ちで聞いていたと思う。

だけど、校内放送が終わった直後、僕は現実を直視する羽目になった。

運動場で大きな爆音が聞こえた。

と、同時に、砂埃が保健室の窓から入ってきた。

僕は、窓から外を見た。

大きな煙を作り、赤い火が、上空20mほど、立ち上がっていた。
地面はえぐれ真っ黒に焦げていた、

僕は保健室から、思わず飛び出した。

目の前には、大柄の男が立っていた・・・拳銃を構えて・・・

大男は、僕のことには気が付いていない。

誰かに、拳銃を向けている。。

だれに向けているのか。銃口の先には、黒ずくめの男・・・これは犯人なのか？

だとしたら、この人は刑事さん？

刑事さんは、拳銃の引き金を引いた！！

校内に銃声がなり響く・・・

刑事さんは、うずくまるように倒れた。

刑事さんは、その黒ずくめの男に撃たれてしまった。

血が、廊下を染めていく。。

刑事さんは、うなっている。

「畜生・・・」と言いなから、

刑事さんは悔しがり、目に涙を浮かべている。

僕は、犯人と目が合った。

犯人は銃を持っている。

僕は、死を恐怖した。

死にたくない。生きたい。

僕は、思わず、刑事さんの傍らにある、拳銃を拾った。

そして、黒ずくめの男に向けた。

「う、うごくど、う、撃つぞ！！、犯人だろ！！お前。」

犯人は、持っていた銃を下ろし。不気味な声で話しかける。

「おおお！！意外な反応だな～～、でも僕には、絶対に当てられないよ～～」

僕は、男のその挑発的な態度に腹がたった。

「馬鹿にするな、こんなものモデルガンと同じだ、

お前は人を殺した。殺されても文句は言えない。

僕は心の中その様に思い撃った・・・

だが、あたらなかった。

無意識に怖くて手が震えていたのかもしれない。

犯人には逃げられてしまった。

大人たちが、銃声を聞いて駆けつけてきた。

僕が拳銃を持っていることに驚いている様子だった。

先生は、険しい顔だったか、
そつと僕を抱きしめてくれた。
先生からは、涙がながれ、僕の服を濡らした・・・

近隣を巡回中の警察官カエデ

私は、パロール中に、爆弾事件の要請が入り、XX小学校に向かった。

わたしが、駆けつけたときには、仲間の警察官の息は無かった。
銃弾は、心臓を貫通していた。
手の施しようはなかった。

私は、先生から事件の概要を聞き、理解する

私は、とんでも無いところに来てしまったと思った。
自分自身も犯人の人質に取られてしまったということである。
私は、一気に力が抜けてしまった。

だが、私は直ぐに立ち直った。

犯人の声明が嘘である可能性と、沢山の警官隊がこちらに向かって
いる事実が

私を不安な気持ちから遠ざけた。

私は気を取り直して、仕事を続ける。

私は、犯人の特徴を聞くために、唯一の目撃者の少年大介に話を聞く。

少年は、泣きながらも犯人の特徴を教えてくれた。

判ったのは、犯人は黒いフードを被っている。顔は、ありきたりな
日本人顔。

声の特徴は高め、ふざけた感じのテンション。

私は、この情報を元に、周辺一体に包囲網をかける指示をあおぐ。

私は、心の中で、犯人像を分析する。

（少年は、犯人に向けて発砲したらしいが、

犯人が、ふざけているというのは、どういうことか？

いくら子供とはいえ、拳銃を向けてふざけられるなんて、犯人の異常性が感じざる終えない）

少年大介は、発砲した玉があたらなったことに、自己嫌悪に陥っているようだった。

私は、ふと、犯人が逃げ去った出口を見ると、血痕らしきものを見つけた。

どうやら、これは、少年が発砲した玉にあたったものだろう。

ほんの少しの血痕で、良く見ないとわからないくらいだが、血痕の可能性がある。

もし、血痕なら鑑識に出せそうだ。

私は、少年を褒めてあげた。

「頑張ったねえらいよ。勇気があるよ。

玉はちゃんと男の人に当たったよ。

ほら、あそこに小さな赤いものがあるでしょう

あれは血痕と言って、犯人を特定することができるのよ」「

少年にそう言うと、

「それくらい。知っているよ。」「と、

馬鹿にするなという感じで笑顔になってくれるのだった。

「じゃあ、刑事さんあれ教えて、どうしてあの車の窓は中が見えな

いの？」

少年は、とおくの運動場の外を指を指していた。たしかに、車がみえたけど、私には距離が遠過ぎて目を凝らしてもわからない。

刑事「大介君、視力いくつ？」

大介「2.0、それ以上あるかも」

少年は、まるで、それが唯一の自慢であるかのように語った。

.....、教室では.....

少年大介とは、警察官カエデと、教室にもどった。

大介は、警察官カエデに既に慰められていたため、教室の光景と自分にギャップに、驚く。

生徒達の会話

「僕達死んでしまうの？」

「今日、休めばよかった、無理してくるんじゃない」

「学校なんて、最初からなければよかった」

愚痴を、言う者、絶望するもの、泣き崩れる者。

教室はパニック状態で、先生は、子供達をなだめるのに、必死の様子である。

警察官カエデは、自己紹介をして、生徒達を守り抜くことを誓う。

「私達警察は、絶対に勝てます。正義の味方が負けるはずはありません。だから、安心して」

カエデの誓いと同時刻

警官隊が駆けつける。

校舎の中には総勢30名の爆弾解体のプロが突入。

外には、パニックを防ぐための、警官隊、万が一に備えた消防隊、救急隊。

そして、マスコミ、報道も集まってきた。

生徒達は、この光景を見ることで、安心して次第に泣き止んでいった。

ヒーローたちは子供達に勇気と希望を与えたのだった。

現在の時刻 9:30 爆発まで、残り4時間30分

校内の人数 583人。 爆弾解除達成人数まで、あと2417人

開始（後書き）

この物語は、まず、余興から先に考えてて、人にとって一番の恐怖や苦痛は何かというところから探求する過程で、こうなった。

余興

時間 9 : 3 0

――その頃 6年生教室にて

大介「おお！！すげー！！外見てみるよ！！翔ちゃん。」。

大介は、この危機的状況を楽しんでいるようだ。

先ほどの、犯人と交戦したことで、既に大きな恐怖を知ってしまった。今のこの状態と比べると、恐怖心が和らいでしまっているのだった。

消防車、警察隊等、の突入は、大介にとっては新鮮であり、好奇心を駆り立てる。

翔太「大ちゃん、こんな時に何をのん気な事、言っているんだよ
~~~~~」

翔太は大介の親友である。翔太は、涙を浮かべながら、事件の状況を大介に説明する。

大介は翔太の話を見無視して、夢中で窓にかじりついて、外を見ている。

「おお！！、翔ちゃんの親父さん、来ているぞ！！」

それを、聞いた将太は、驚いて、窓を見る。

将太の父親は刑事である。警官隊ともに、校舎に入ってくる。将太の顔が笑顔になる。

―――警官隊会議、職員室にて―――  
警官隊隊長飛来 編

私は、警官隊隊長、飛来 この事件の指揮を担当する。

私は今、放送室で発見された余興メモを読んでいる。  
その余興メモには、以下の様なことが書いてあった。

1時間ごとに、以下の余興を実行しろ。

1時間目、9～10:00

運動場で、誰か2人が殺し合いをする。必ず一人死ぬ事

2時間目 10～11:00

運動場で、6年生以下の女と誰か男がSEXすること、

3時間目 11～12:00

運動場で、夫婦を殺し合いさせること。必ず一人死ぬこと。  
夫婦は、この学校に現在通う生徒の親でなければならない。

4時間目 12～13:00

運動場で3時間目に生き残った親と、その子供を殺し合いさせるこ  
と、必ず一人死ぬこと

注意事項

?10:00までに、テレビ中継で、「神の代理人」の声明と、こ  
の余興の全内容を発表して  
世間に公表しなければならない。

? これらの余興を実行するのは、校舎に居る人間のみである。  
? 余興を目的としない人数。3人以上が校舎から出ることはあつてはならない。  
? 各、余興の行為は、テレビ中継を使って、詳細に映し放送すること。  
? 死体は、テレビ中継を使ってズーム撮影し、死体の状態を詳細に放送すること。

これらを実行しなかったり、また、余興実行者が逃げ出した場合や、また、替え玉を使って成りすますような、騙し行為と我々が判断した場合も起爆する。  
実行して成功した場合は、その人間は自由にしてもよい。

-----  
私は驚愕した。

これを実行するだと・・・、世間は黙っちゃいないぞ。  
どれ一つとして、実行する訳にはいかない。  
1時間目の終わりまでは、残30分しかない。  
それまでに、爆弾を見つけ解体しなければ・・・

まず、私は、メンバーに召集をかけた。

メンバーに事のあらましを説明した後  
万が一、時間が間に合わなかったら、自分が1時間目の余興で死ぬことを告げた。

今は、余興をするかしないかを、考えて時間を潰す余裕はない。  
私は、隊員の活力を下げないためにも、これだけは、先に決めることにした。

私を殺す役目を誰にするか迷ったが、私の信頼の置ける隊員が、名乗りを上げた。

彼の名前は東田。

私の決断した理由を一瞬で理解できる良い隊員だ。

私が仮に死んだとしても、彼なら、後の仕事を上手くやってのけるだろう。

次に、私は、全生徒と学年に、一斉に爆弾をさがす指示を出した。

爆弾が見つかるまでその間、

私は犯人の手口を分析していた。

犯人は、校舎から出る人間を監視する為に、学校付近、もしくは内部に犯人が居る可能性を考えた。

外だとしたら、校舎から出るところを目視できる場所だろうか？

遠距離から双眼鏡で監視しているのだろうか？

最低でも2人以上、表校舎、裏校舎からの監視がついているはず。位置的には、あのあたりか？

私は、見つけた。運動場の外の道路、4台の黒いワゴン車が学校を囲む様に角に一台ずついた。

外から中は見ないように、コーティングガラスが張られているようだ。

私は、熱源スコープを使って内部を観察した。

各車内には、二人ずつ犯人が乗っていた。

私は、考えた。

捕まえるなら、犯人全員を同時に制圧しないとイケない。

一人でも残れば、仲間の異変に気づいて起爆されるかもしれない。いや？そもそも何人いるか判らない。

監視する者を更に監視をする者がいるかもしれない。

情報が無さ過ぎる。

下手に、あのワゴン車には手が出せない・・・。

私は、監視するワゴン車を更に監視する者を、探すように、命令を出した。

そして外で待機している交渉人を手配した、

テロリストなら交渉が通用しないことは判っていた。

だが、やれることは、もう、これしか自分には残されていなかった。

わたしは、上層部に掛け合い、指示を仰いだ。

軍隊は、要請を受けて、こちらに向かい始めている。。

総理大臣に電話が繋がり、総理からの余興についての指示を受けた。だが、具体的な指示はない。「余興を避ける！」ただ、それだけであつた。

「隊長！！この爆弾は、解体用の爆弾です。校舎を一掃するには、あと、100個近くあると思われます。」

隊員の報告に、私は少し安堵した。

このタイプの爆弾は、民間業者がビルを解体する目的で使う物であり、

爆弾を解除するのは、比較的容易だったからである。

――1時間目終了間際、10分前――

あと、直ぐで解体し終わる。

と、その時、子供達が、私の元へ来た。  
来て欲しいところがあるという。何かを見つけたようである。  
少年達は、使われていない教室の床下を指差して、爆弾だと訴えた。

地面を調べると、時計の秒針音が聞こえる。

「まさか!!」

私の直感が外れて欲しいことを願った。

私は、放射線探知機を使い分析する。

探知機の針は、一杯にブレル。

私は、確信した。この下に核兵器が埋まっている可能性があることを・・・

事件は学校倒壊というレベルではなくなった。

もし、爆発したら、大惨事になってしまう。。。

私は、恐怖とプレッシャーに押しつぶされそうになった。

だが、時間は迫っている。もう、10分もない。。  
爆弾を掘り返す時間には、とつてい間に合わない。

私は、死ななければならぬ。

ちくしょう!! 私は、犯人に、まんまと騙されてしまったのか!!  
ビル解体用の爆弾はフェイクで時間稼の為であったのか!!

気付いたところでもう遅い。

私は、負けだ。

いさぎよく死んでやろう。。

私は、指揮権を隊員東田へ移した。

東田は、何も言わなかった。  
隊員達も何も言わなかった。

私は運動場へと向かった。

テレビを通して大多数の人が知っているのだろう。  
私を通る道を空けてくれる。

私に敬礼をするもの。目を背くもの。何も知らないもの。  
いろいろな人間が居る中で、私の家族も居た。

家族は、校門の前で、警官隊にガードされていて、入れないでいる。

この位置から、死ねてよかった。

ここなら距離が離れているし、私の顔も良くわからないだろう。

テレビ中継の報道陣、カメラマンが集まってきた。

彼らは、私にインタビューをしてきた。

これから、死ぬ人間にインタビューとは・・・  
ある意味、勇気のある行動に私は感心した。

私は叫んだ。

「犯人見ているかーーーーー!!!!!!」

「お望みの余興とやらを見せてやる。俺が死んでも必ず仲間がお前  
をぶっ潰すからなーーーーー」

悔しいけど、気持ちよかった。

全国に私の勇士が見られたと思うと、少し、誇らしくなった。

「さあ、撃つてくれ。。。」

出来れば脳天を一撃でお願いする」

私は覚悟ができていたが、東田は苦しんでいた。死ぬ人間より、殺す人間の方が辛いというのは、私は、考えていなかった。

すまない。

東田・・・後の事は頼んだぞ・・・

-----  
-----  
-----

東田は、飛来を撃ち抜いた。

静かに倒れ落ちる飛来。

東田は、倒れる飛来を抱き止める。

テレビの報道は、飛来隊長をアップでカメラに収めている。

嫌がり、目を背けながらも、カメラに収める。

死体の状況を詳細に放送する。それが犯人達の要求であるから・・・

だが、その光景をわざわざ見ようとするもがいるのだろうか・・・。

テレビの向こうでは、チャンネルを変かえる人々。。

目を覆う人々・・・

だが、真剣に食い入る様に見る者も居るかもしれない・・・犯人達のように・・・

その者たちは、今、どんな表情をしているのだろうか・・・

## 余興（後書き）

余興考えるとき

チエーンソーを使わないといけないとかルールを入りようかとか、考えるのが面白かった。

監禁状態だともありだとも思うので、自分なりにどんな犯罪を試みるか考えると楽しいかも。



だが、先生は、窓に近づくとさえ許すことは、なかった。

大介は、退屈になってきたのだろうか。

友達に、犯人との交戦を聞かせて自慢している。

男の子達は、食い入るように、大介の話にかじりついた。

笑っている者もいる・・・

彩「あんた達、馬鹿じゃないの!!」

彩は世話焼きの女である。

刑事の死体の血なまぐさい話で盛り上がる男達に一括を入れた。

「女子達が怯えているじゃない!!そんな話するんじゃない!!」

大介は、怯えている女子に気付き話を止めた。

男達もそそくさと、逃げるように、彩から離れた。

翔太、は、悔しそうな顔をしている。

2人は、彩のことが好きであつたら、軽蔑なまなざしで見られたことにショックを受けていた。

――校庭の外―親達――

校庭の門は硬く閉ざされ居る。

入ろうとする親達を必死で抑える、警察官たち。

親達は、余興を知っている。見たくない。

ここで死ぬ事を受け入れている者

祈りをささげるもの者、子供たちと、電話で連絡を取り合い、励まし合う者。

それぞれが、心を一つにして、子供の事を思っていた・・・

親達から子供たちに、電話が掛かってくる  
子供達は、親と励ましあい。笑顔を見せる

大介「お前達は、親が居ていいな・・・」

大介は、呟いた。大介には親がない。  
物心付いた時から、施設で育ちである。

目つきが悪いことが原因で、引き取り手は、未だ現れていない。

翔太「あ、ごめん・・・」

翔太は、携帯を置いて、悲しそうな後悔した顔になる。

大介「何言つてんだ？おれは、羨ましい！って言っているだけだろ」

「可愛そうな人を見るような目で、見るんじゃない。」

「俺にとつては、親が居ないことは当たり前前みたいなもんだから、別に悲しい訳じゃないだ。」

「電話をつづけるよっ」

大介は、そう言つて、翔太にチョップをカマシタ！！

そこに、翔太の父親が現れる。

大介は、翔太の親父を見るなり、ソワソワして、言い訳を言おうと  
している。

だが、親父は、チョップを見ていなくて気が付いていない。

翔太から、電話を借りて、翔太の母親と話し出した。

大介は、ほっと胸を撫で下ろした。

――

翔太「お父さんと、お母さん、ケンカをしていない・・・。」

翔太は心の中で思った。

翔太の両親は、現在離婚協議中。

どちらを引き取るかで、日々もめている。

親父は刑事という職業柄、家に居ることは殆ど無い。

夫婦すれ違い、仲は、冷め切っているのだ。

父親と母親が電話で会話している。

翔太はその光景を見て、仲直りしてくれることを期待してる様子を見せる。

――  
――  
――  
時間 10:15――  
――

――核爆弾のある部屋で――

軍が合流した後、飛来隊長から指揮権を引き継がれていた東田隊員は、

事の状況を説明する。

指揮官東田は、召集をかける。

軍人、先生達、警察隊は集まってくる。

解体が間に合わず、2時間目の余興が逃れられない事を説明した。指揮官の考えの元に協力を仰ぐ

指揮官は、考えた・

「少女のSEXは、替え玉偽装はできない。」

たとえ、AV女優を替え玉に使うとしても、AV女優が、こんな危険なところへ来る可能性はまず無い。

校内放送で、募集をかけるか？

だめだ、パニックになる。

まず、女子だけを別の部屋に集めて、説明した後、募集をかけるか？

指揮官は、感情を抜きにして、SEX候補を探した。

女子達は嫌がった。

だが、2、3人の女子が、ある条件を受け入れてくれるなら、SEXしても良いと名乗りを上げた。

好きな男の子なら、しても良いと提案してきたのだ。

指揮官は、またも感情を抜きにして、

仕事をした。

指定された男子は、嫌がった。

だが、生きるためには仕方がない、その男子は、悩んだ末に了解した・・・

聖職者たち、教師や、警察官は、とても複雑な心境だった。

危機から免れるのは、うれしい。けど、倫理的な罪の意識に蝕まれていた。

葛藤があった。

軍上層部も、総理大臣も葛藤していた。

だが、まだ核爆弾と決まった訳ではない。

核爆弾ではないことを祈り続けていた。

時間 10:50

爆弾が、ようやく、掘り起こされた。

掘り起こされた爆弾は、重金屬で覆われている。

幅、2 m、高さ50 cmほどにもなる。

軍による分析が始まった。

軍人の顔は恐怖にゆがんだ。

絶望を感じている様子である。

軍の動きは、急にあわただしくなった。

軍は、本物の核兵器と、断定したわけではない。。。

万が一にも、巧妙に見せかけたダミーである可能性もある。

むしろ、その可能性のほうが高い。

だが、核が本物が偽者であるかは、関係ない。

彼らは、最後まで、決められた任務を遂行するだけなのだから……

時間10:53 順調に余興2時間目は実行された。

テレビ報道陣は戸惑いながらも、懸命に職務を遂行した。

親達から悲鳴の声。テレビの向こう側で興奮を隠せない人々。

怒り狂う聖職者。。。

ありとあらゆる感情が、交錯していた……

そうして、余興2時間目の犠牲者のお陰で、皆の命は救われたのだ  
った。

## 犠牲（後書き）

ちなみに一番最初に思い付いた展開は、犠牲者が選ばれなければ、焦った教師が少女彩の首を絞めて殺した後、レイプする。である。心肺蘇生を施されるも、昏睡状態になる。

## 試練（前書き）

この物語は、色々な意味で作者に試練を与えた。  
どう頑張っても話をコネクリまわしても、このホラー感覚を強みとして話を応用しても実用化できそうなシナリオが作れなかった。今は、疲れて諦めて意気消沈中である。悔しさだけが残るといふ作品となつてゐる。

## 試練

時間 11:00 現在の校舎人数 615人

――核兵器 部屋で、――  
指揮官東田は、壁を強く殴りつける。何度も殴りつける、  
助かったことへの喜を感じてしまう・・・そんな自分が許せない。  
罰を与えるように自分を傷つける。

解体チームは、懸命に解体作業を続けている。  
だが、チームの顔色は悪い。

チームの想定外の想定よりも遙かに超えた解体困難な畏が爆弾に張り  
巡らされていたのだ。

チームは、いつ解体が完了するのか、断言できなかった。

指揮官は、絶望的な状況を把握し、上層部に報告する。

程なくして、軍部上層部から命令が出る。

一般人が校舎に入れる許可が下りたのだった。

この命令は、助からない場合の最悪のケースを想定したものである。  
親達は、どちらにせよ避難しない。  
ならば、今のうちに、子供達に会えるようにしよう。  
そういった、配慮を込めた命令であった。

11:10分

一般人が校舎に入れる許可が下りる。

――



クラス中に両親の姿があり、にぎやかになっている。

それを羨ましそうに見ている大介に、警官カエデが声を掛ける。

カエデは、大介の話し相手になっている。

「よ！寂しいのか？少年よ！！お姉さんのオツパイでも吸つか？

「ただ！！だれが、．．んなオバサンの腐った乳．．．」

大介は、顔を真っ赤にして怒り狂っている。

「誰がオバサンだってー！ー！ー！ー！ー！！！！！！？」

カエデは、冗談のつもりで脅したが、冗談が通じなかった。

さっきまで赤色だった大介は、シヨンボリしおれて、ブルーになってしまった。

カエデは、話題を切り替えることにた。

カエデ「大介くん、警察官のこと、どう思う？」

大介「どうって．．．まあ、好きでも嫌いでもないし．．．

「俺は、それよりもスワットが好きだ。

「テロリストを華麗にやっつけるんだ。

「あの、戦闘服もみたいなのも超カッコいい。

大介は、話に食いついてきた。

この話題が、気に入ったようだ。

カエデは「所詮は子供」と、いう目になり、会話を合わせる。

カエデ「大介君なら、スワットになれるよ。。

大介「え！？ほんと？

カエデ「君のその視力は武器になる。」

遠くからの攻撃するスナイパーとか、適任だよ。

大介「え〜〜〜〜」

俺は、もっと近距離で、犯人を制圧するのがいいな、

遠くからチビチビやるなんて、弱い者いじめみたいじゃん。

大介「スナイパー以外では、なんか無い？？」

カエデは、お笑いのツツコミの要領で、キツパリ答える。

「無いね！！成りたいなら、努力しまくって勉強することだね」

大介「え〜〜〜〜〜〜〜〜！！勉強嫌い〜〜〜」

2人の会話は続いた。

カエデは家族の話。仕事の話、いろんなことを大介に聞かせた。

-----  
時間 11:30 現在の校舎人数 1163人 -----

-----  
親達のいくつか、音楽室へ向かおうとする。。  
自分が犠牲になることを覚悟している。おびえて体が震える親もいる。

その覚悟を知らずに引き止めようとする子供達

「どこにいくの？一緒に居てよ」

言い訳を考えて困る親。

何も言わずに行ってしまう親。

いずれにせよ、子供達は、軍人に抑えられて、教室の外に出られない。。。

低学年の子供達は泣くばかり。。。

音楽室では、勇士100人が参加をしていた。

親達は、校舎に入る前から決断していた。

親達は、子供を見殺しに出来ない。かといって自分が犠牲になるのは怖い。

他人が名乗りを上げるのを待ちたい。

けれど、他人任せにすることも罪の意識を感じる。皆が悩んで苦しんだ。

相談しあった結果、くじ引きで決めるルールをグループは作っていた。

「くじ引きで当たった夫婦は、余興3、4時間目をを実行しなければならぬ。」

再度、確認が行われた後、くじ引きが始まった。

だが、これは、決まったことではない。

核を解体するか、校舎の人間を3000人にすれば、余興は避けられる。

皆は、希望を捨てなかった。

-----  
現在、校舎人数1830人

翔太編

僕は、お母さんに呼び出された。  
教室から、出るみたいだ。

どうして僕だけ出られるのだろう？

教室の皆は、出たくても出られないのに・・・

-----

母は、将太を連れて教室を出た。

将太は訳もわからず着いていった。

「お母さん、どこに行くの？皆、教室にいなければいけないだよ」  
母は無言のままである。

将太の顔を見ないようになっている。

涙を流しそうな自分をこらえるような表情である。。

将太の手を握った手に力が入る。

校舎出口にまでたどり着く。

「お母さんどうして？校舎から出たら、爆発するんだよ」

母は、涙をこらえる。。

軍や警察が横に並び、敬礼をしている。

将太は驚いている。母にどうして敬礼をするのかわかない。

母にいくらと問いても、軍の人に問いても、何も言葉は返ってこない。

母は、翔太に目隠しをさせる。

「絶対にとっちや駄目だからね。」

母は強く強く念を押した。

翔太は訳がわからないが、周囲の雰囲気にかけて断れない。

隊長東田が母にサイレント式の銃を渡す。

母は、翔太を連れて、運動場に出る。

「あれ？ここ？運動場？」

どうして、どうして、皆を置いていくの？大ちゃんは？お父さんは？」

翔太は、母の引つ張る手を、振りほどこうとする。

けれど、母の力は、強く、翔太は、テレビモニターの前まで連れて行かれる。。

母は、翔太を抱きしめた。

涙を浮かべている。

母は、一方的にしゃべっている。

反論をさせる余地の無いように、

「お父さんとお母さんは、あなたが大好きよ。誰より好き」

「だから、絶対に死なせたくないの？わかる？」

「あなたは大きくなって、お父さんみたいな立派な男になるの。」

ここで、死んだらいけないの。

学校の皆と一緒に大きくなって、幸せになるの。

そして、お嫁さんをもらうの。

好きな子一人くらいいるでしょう。

その子と結婚する。

翔太は、うなずくきながら聞いている。。

母「たとえ私とお父さんが居なくてもても、  
「あなたは、幸せに生きるの。」

翔太のうなずきが、止まる。

翔太「どうして？そんなに父さんと離婚したいの？」  
「お母さんもお父さんもずっと一緒がいい。」  
「ずっと一緒に居たい。離婚なんてやっぱりしないで」

母は、笑顔で柔らかい口調になる。、

母「お母さんは、お父さんのこと好きよ。お父さんも、お母さんが好きよ。」

だから、離婚はしない。ずっと一緒だよ。」  
「けど、ずっと翔太と、一緒に居るわけじゃないの。」

翔太は大人になって独り立ちするの。  
それは、翔太が私達を必要としなくなることなの。  
そういう意味で、お母さん達は、居なくなるの。

翔太は、意味が理解できなかった。  
だけど、離婚をしないと云う言葉は理解して、うれしそうな表情をしている。

母「けれど、世の中は楽しいことばかりじゃない。  
厳しいの。」

試練が沢山あるの。  
でも、絶対に負けないで欲しいの。

あきらめないで頑張れば、必ず試練に打ち勝つことができるの。  
お母さんは、翔太が試練を乗り越えたら、もっと好きになる。

だから、どんな試練が訪れても、負けないで。  
お母さんを、もっと翔太のことを好きにならせて。  
ずっと好きで居られるように、試練を乗り越えて証明し続けて。  
将来私が居なくなつた後も、それを続けて・・・

翔太は、うなずいた。

「僕、どんな大変な試練だつて乗り越えてみせる。  
お母さんにそのことを証明してあげる」

母は、悔し涙は、笑顔の涙に変わる。

母は心の中で思う。

「見ている。、あなたをずっと見守っている。何があつても。

翔太の試練を乗り越える姿を見る。

死んだとしても。空から見ているから・・・」

母は、翔太に持たせた銃を自分に頭に向けさせる。

母「翔太・・・人差し指を手前に強く引いてみて・・・」

翔太は、何も知らないま、銃の引き金を引いた。

銃弾は、母の頭を貫通した。

翔太を抱きしめるように、倒れこむ母。

翔太は重さのあまり、母を落としてしまう。

翔太は、母に話しかける。

母が返事をしなことに、不安になつた翔太は、目隠しを取ろうとする。  
だが、きつくて取れない。

軍たちは、翔太を抱えて運び出す。

翔太は、訳が判らず抵抗する

「何？だれ？一体なんなの？お母さんはどうしたの？」

翔太の母を呼ぶ声が、運動場に小さく響いていた・・・

-----

時間、1:00 現在、人数、2142

タイムリミット残り1時間

隊長東田の先導で、

校内全員を3階フロアに集めた。

爆弾は、核とは、断定はされていない。

運良く中身は規模は小さいものかもしれない。

そう信じたいたい気持ちだが、隊長東田の気持ちに働いた。

仮に、威力が想定よりも弱いならば、3階ならば、爆風を避けられる可能性あったのだ。

子供達と親達は、残りの時間を惜しんで会話をする。

子供達の声

「どうして3000人集まらないの」「私達は見捨てられたの？」

大人達の声

「大丈夫きつと、助かる。沢山の人たちが頑張っている。皆を信じなきゃ。。」

親達は、子供達に覆いかぶさる。

爆弾が爆発しても、自分の子供だけは助けたい。

親達は子供を守るために爆風からの盾になろうとしている。。

カエデ「大丈夫、大介君は私が守ってあげる」

警官カエデは、そういつて大介を抱きしめる。

自分の恐怖を大介に悟られまいと気丈に振舞ったつもりだった。

大介は、一瞬テレしてしまうが、カエデの体が震えているのに気付く。  
大介のテレは消え、心に恐怖が襲ってくる。

大介「ああ！！今日は給食は、俺の好物のカレーだった！！楽しみ  
だな〜〜〜」。

「そうだ！！後で、世話になった礼として、カエデおばさんに、一  
口だけ分けてあげる・・・」

大介にとっては、精一杯の強がりのつもりだった。

警官カエデでは、気を使われたのだと感じた。

子供に気を使われるのは、気恥ずかしい。

だけど、今のカエデにとっては、それが、嬉しかった・・・

守るべき存在があることは、自分を強く奮い立たせるだろうか。

カエデの震えは止まっていた。

「信じる・助かる・大丈夫」

皆が、自分に言い聞かせた。、恐怖をぬぐいさる為に、必死であっ  
た・・・

時間 1:40 タイムリミット残り20分

運動場には、次々と勇士が押し寄せてきている。  
翔太の母の死の中継放送をキツカケ二にして集まってきた。

そして校舎人数は、3000人に達した。

だが、核爆弾のタイマーは止まることはなかった。

犯人達は、テロリストである。

最初から、助ける気など無かったのだ。

それが判つていても、勇士は集まった。

その事実が、解体チームに勇気を与え、集中力を与える。

チームは、最後まで、解体をあきらめない。

時間 1：57分 爆発まで残り3分

チームは、ばてて、その場に倒れこんだ。

解体が成功したのだった。

チームは祝杯を挙げるように、大声で叫んだ。

隊長東田は、この事実を各方面に報告しながら

校内放送で勝利のメッセージを伝える為に走る。

時間 1：59 2：00まで、10秒前

運動場にて

人々は、空を見上げていた。

風邪を切る大きな音に気が付いて空を見ている、

空には、ヘリコプターが飛んでいる。

へりは、校舎3階の真上にたどり着いたところで、何かを落とした。  
・

その瞬間、大きな光が、学校を包んだ。  
町を包んだ。

テレビを画面をまっ白に染めた。

テレビの前の人々。日本中、世界中の人々が、ぼうぜんとしていた。  
そして祈った。神に祈りを捧げた。

無神論者でさえ、神にすがった。

傍観者にできることは、それ以外に何も無いのだから……

^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^

おわり、

## 試練（後書き）

実はこの物語には続きを予定してたのですが、もろもろ理由で却下しました。

でも、一応ネタとして面白いので書いてきます。

ラストで核が爆発したかのような演出してますが、本当はヘリから、それなりの強い爆弾が落とされただけという展開です。

ヘリはリモコンにて遠隔操作されていて、そのまま自爆爆発。

4つのワゴンの中には犯人では無く、肉の塊の様な重度自閉症患者が居るだけで、犯人の仕組んだカモフラージュだった。ワゴンから校舎なんて、最初から監視していなかった。

ワゴン一台だけが余興の見える運動場のみを監視できる様になっていて、犯人は余興のみの為に双眼鏡で確認していた。

ワゴンの下には穴が開いていて、マンホールの底と繋がり、犯人は地下からまんまと逃げ出した。

3階に逃げていた人たちは大多数が死んでしまいましたが、大介、翔太、彩の3人がメインとして生き残ります。

彩は昏睡状態になり、翔太は自分で親を殺した映像をネットで見てしまい俳人化、事故に合い彩と同じく昏睡状態になる。

大介は孤児院にて暮らしていて、翔太と彩の見舞いに病院と行き来します。

そんな折、テロの影響で世の中の犯罪率が急に高まり、孤児院にいる大介の姉役が誘拐される。大介は自転車で追いかけるがどうにも追いつかない。そこで、ビルの屋上上がり、車の後を追いかける。そこで秘められた能力が開花。数キロ先の車の位置が見える様になる。一瞬だけ能力が発動しただけなのだが、それでお姉ちゃんは

助かる。

その後、時間は経ち、大介は大人になりスワットになっていた。そこで、テロを引き起こした張本人を見つけて追いかける。だが、まるで銃弾が当たらない。そして、瞬間移動する様に近づかれ、首ねっこを捕まれて、ビルから落とされる。犯人は意味深に「いつて来い！」と告げながら、大介に止めを刺す。その直後に翔太が目を覚ますのね。

翔太は記憶喪失であり、リハビリを開始。

自分に起きたできごとを探す内に、学校にたどり着く。

運動場にて何が起こったか察知。3階の滅茶苦茶。運動場に立てられた慰霊碑。

全てを思い出して、悲しみくると、ふやんだじつくに慰霊碑が共鳴。

そのまま、翔太は爆発する様に運動場から消え、気がついた時には、目の前に親を殺してる自分が居る。翔太自分が親を殺す瞬間にタイムスリップした。そんな演出。

運動場にて突如現れた翔太。

瞬間移動の様に現れた翔太は松葉杖を持った病人で成人くらい。

犯人はいきなりの現象に驚き、戸惑いながらも喜ぶ。

その理由は犯人目線の過去の話の展開をさせると判る。

犯人はキリストの聖書原本にある物語の思想にのっとして犯罪を犯すというアホな人である。大金持ちで裕福すぎて人に叱られた事が無い。親に相手されず、メイドを虐める様な生き方をしていた。幼少期にて、果報である聖書の原本が好きであった。祖父の自慢の隠しコレクションであり、片身。彼は祖父にでき愛されていたが、祖父は寿命で死んでしまう。しかし、親は祖父の死を喜んでいた。父は相続関連で祖父と揉めていたのね。

彼は死の無常さを知りながらも、死の影響力について疑問に思うになる。

幸せそうな親を見ると、素直に祖父の死を悲しむ気持ちになれなかったのね。

その疑問を探し物事の真理を追求していく果てに、絶対の基準は何か考える様になり、最終的に平和であり、聖書だと気づいた。

しかし、聖書の物語は悲惨な争いと試練の中で人が生きる希望を得て強くなるというものだった。

歴史を紐解けば、いつも大事件の後に人は正義感を強くしたり信念を強くしたりと、死という名の試練がある事に世の中の生産性があると感じていた。

だからこそ、犯人は試練を人に与える事を正当化した。

形はいびつだが、愛という安らぎが得られなかった犯人は何か、生きる為のかてとなる基準が欲しかったのである。

その基準と成ったのが結果として正当化された殺人で、唯一信じられる安心事みたいなものであった。

それを主張してしまった。

そして原本には『試練与えし時、魔法が使える天使現れる』と書いてあって、それを信じた。この時点で大きく病んでる。

瞬間移動で運動場に現れてきてテロ事件を救った翔太を後に拉致する。

魔法を見るために彼は拷問するが、結果として翔太に起きる世界に生かされる奇跡によって助かり逃げられる。

その直後に、大介が目覚めますのね。

目を覚ました大介は、ベットの上で、殺されてなかった???という感じ。

リハビリの後、仕事に復帰。その際、能力が開花。視力以外にも身体能力が通常でなくなる。テロリストを容易に制圧できるように。

諦めずにいた、そんなある日、神の使いを追い詰める。しかし、神の使いに影響された模倣半だった。

でも諦めないで、やってたら、ついに本命にたどり着く。

犯人は追い詰められて言い訳（聖書で人を死ぬとかかんとか、世界が終わりだとか、時間が無いとか言い、既に狂ってる）したあと、隠し持っていた部屋のドアを開き。挑戦状をぶつける。

ドアの向こうは異世界と、なぞの光であるプレッシャーというエネルギーが見える。

その未知のえんるぎーに、人は直感的に世界の破滅をイメージすると、そこへ、翔太のプレッシャーエネルギーがつつこんで行き、エネルギー同士の爆発が起こる。その爆発が消えた後、人類に新たな世界の入り口が提供され、なんとなく区切り。

大介がビルで超能力みたいなのを受けた真相と、もう一人の謎の犯人は、その異世界で解明されてくみたいな、ファンタジーになる。その謎の人の将来は、いまもって良く判らん。がファンタジーだから何でもあるな。

実は大介が学校にて最初に銃をぶっ放した相手もこの人で、この人は、タイムスリップして過去に遊びに来て、見物してただけとか？いずれにせよ、異世界の先がどんなのかを書いたら、ロマンが崩れていくと思う。

（あとかきのあとかき）

映像的雰囲気でも物語を大筋を設定したつもりだが、これは大筋と言つていいのだろうか？長いそんな話は一度も作った事ないし、筋の

概念が良くわからない。

プロットとやらを煮詰めるといって、これを煮詰めていって、まともなのができそうな確率ってあるのかな？ いろいろやかましい。とにかく終わりたい。でも、なんか思う事があつたら教えて！

結構、考えまくったのだけど、登場キャラの人物を細かく描かない事には、映像としても無理があるし。でも、本編は色々のキャラに手をつけ過ぎて、それらを描いてもきつと退屈で面白くないという、にっちもさっちもいかない感じで。

面白いと思う話なのだけど、企画上、実用性が皆無な感じで、でも、俺が経験不足だから、本当は改善していけるのだろうかとか、うざ、うざ、うざ、やかましい！と独り言ってるのである。以上、今度こそ終わり。

番外編 似ているけど全く違う話 ここから読んでも構わない

大介と弟3人、他友達7人が空き地にて缶を蹴りをしている。

日がくれて夕方になり、買い物帰りの女子高校生（聡美）が現れる。

「大介、帰るよー！ー！ー！！」

その言葉に、大介は、まだ遊びたい足りないという我俣の表情をसरる。

「大介！ ほら！！ 早く！！」

大介の意は高圧的態度でかき消させる。

大介は渋々感蹴りを中断し、弟たちを連れてメンバーに別れを告げて帰る。

残されたメンバーは、大介が帰る姿をみて。

「そろそろ俺も帰るか」と、帰りだす。

空き地からは次々と子供達が居なくなる。

女子高生（聡美）、大介、弟3人アヒルの群れの様に帰る。

「さと姉ちゃん、今日の晩飯何かな？」

「ん？ カレー」

「おっ！ まじか、おかわりしよう」

5人は、児童養護施設ひかり園へと入っていく。

「「「「「ただいま」」」」」

「はい、お帰り」

施設職員が挨拶をした。

聡美は廊下を抜けて突き当たり大きなキッチンフロアへと行く。

「はい、これ」

聡美はおつかいのスーパー袋を食堂のおばちゃんに渡す。それに続き、ごはんの下ごしらえ、皮むき等を手伝う。

その間、子供達は部屋で宿題にをしている。そのさなか、14歳の不良男が部屋に乱入してくる。ドアを勢い良く開ける。室内でタバコを吸い、大介12歳と3人の子供たちを見て、楽しそうな笑顔をしている。タバコの煙を見て、鼻をつまむ子供たち。

「タバコは旨いんだぞ」匂いがかがせてやる」

そう言つて子供達に息を吐きかけ絡んでくる。

子供、怯えている。無理やり吸わせようとする。

思えば、いつも大介は迫害されていた。

パシリにされたり、友達から借りたゲームを取られたり、こずかい取られたり、言う事聞かなければ暴力を振るわれる様な気がした。というのも大介は良く施設外の中学生生が彼に虐められていたり、喧嘩する暴力を目撃していた。

「た、たばこは良くないと思います」

精一杯の発言である。

大介は怯えてる。

男は近寄ってくる。

「良くないからこそ旨いんだよ」

と息を吹きかける

男は部屋で、子供達に無理やりタバコを吸わせ、そして大介も吸わ

さる。

この迫害に施設の者は誰も気付かず、夕食の用意が忙しくなく行われていた。、

食卓に皆が配置され、20人程の6〜18歳がカレーを食べている。大介達は美味しそうにカレーを食べる。おかわりをする。

乳幼児と幼児は別々の食卓にて食事を食べる。

食後、聡美は職員さんの食器の洗物を手伝い。暴力男は食後、一人外へと出かけていく。子供たちは、残った宿題をしている。

時間 9:00

、聡美は手伝いを終えた後、宿題に取りかかる。外に出かけたシンは不良グループとコンビに溜まってる子供達は早い段階で眠りに付く。

11時

宿題に取え、時計を見る聡美  
シンは不良仲間とバイクで二人の乗り  
子供たちは寝静まっている

時間 12:00

施設に一人の大人連れられ少年入所した。いっき  
夜も遅く、別部屋にて施設員と施設長が挨拶をする。

少年は体中に暴行を受けて処置した跡がある。

翌朝7時、朝食時前にて、施設員がいつきを紹介する。

それに合わせて、いつき自身もお辞儀する。

相部屋は大介とであると告げられる。大介は、いつきの怪我をチラと見る。

そしてごはん時、不良シンが外から帰ってくる。

施設員が再度、不良シンに紹介するも、シンは餌が来た様に嬉しそう。

食後、大介はいつきに部屋に連れて行き、部屋の使い方の説明する。ベットと勉強デスクを割り当て、着替えのタンスを教える。

そこに、いつきは施設員から受けと行っていた荷物、服や学校教材ををしまい込む。

「ここから、学校までは結構近いからな。ラッキーだぞ」

いつきは「そっだね」と一言

学校にて、いつきの入校による紹介が行われる。

何事なく一日は流れ放課後、学校の友達らと一緒に缶けりをするが、いつきは、ルールが判らない。

結構、皆が驚いて説明する。

遊びも終わり夕方、食事前に宿題をしていたら、シン（中2の不良）が部屋に入ってきた。ドンといきよい良くドアを開ける音に皆が驚く。

「お、新入りか、オレはシンっていうんだ、よろしくな」

「い、いつきと言います。よろしくお願いします」  
いつきは焦りながら挨拶をする。

シンはいつきに近寄り肩に手を回す。

「なあ、お前、こずかい持ってないか？　なあ、あるだろう。1000円くらい支給されたんだろ。」  
首を振るいつき

「うそつけ。　出せ。」

「い、いやだ！

「はあ!？」

いつきはシンを押し倒した。

シン「何すんだたよ

シンはいつきを殴る。

いつきも交戦的だと思いつきり殴る。

シンの顔が憎悪になったのを気付いて、恐怖するいつき、逃げる。施設内を逃げまわる。シンも追いかける。

台所までいつきが逃げた。そこで包丁を手に取り、シン以上の憎悪の目で見つめる。

シンは溜まらず恐怖を感じたじろぐ、

いつきはシンを追いかける。シンは逃げる。施設の人達も手が出せない。

いつきは逃げるシン向かって包丁を投げつけるも、避けられた。

暴れる、いつきを職員が取り押さえ、シンは隠れる様に職員に助けを求めた。

いつきは息がを荒げながら、「糞がー！」怒りを叫ぶ

いつきは施設に常駐している職員に注意を受けている。

「・・・いくらなんでも包丁は駄目だよ。なんで包丁なんか持ち出そうとしなのかな？うん？ シン君がこづかいを取ろうと部屋を荒らしたの？。うん、うん、」

いつきは泣いている

話を終え会釈して部屋を後にする。

シンもその間、職員から注意を受けている

「どっちが先に手をだしたの？ なに？ 良く聞こえない。あの子が包丁を投げたとかそういう事は、どうでもいいの。どっちかが先なの？ 答えられないの？ じゃあシン君が先に手を出したのね。なんで、嘘付いたの？ うん、うん、でも、それは良くないって判ってるよね。とにかくあの子に謝るのよ。ん？返事は？ よし、良くできました。」

しょんぼり中のいつきは大介の居る部屋に戻る。

夜11:00を過ぎているが、子供達は事件のインパクトが凄す

ぎて寝ていない。

いつきは、何も告げずに、一人ベットに潜り込む。それに合わせるかの様に大介と子供達もベットに入った。

大介は2段ベット上に向かって話しかける。

「気にするなよ、いつき。包丁投げたのは・・・流石にビックリしたけど気持ちよかったよ。アイツ（シン）には俺も弟も虐められてたから・・・。正直スカッとした。アイツのビビッタ顔、ざまあないし、超面白かった。」

いつきは笑顔に変わる。

「どんな顔してた？」

「そりゃもう、蛇に睨まれたウンこみたいな？」

「なんじゃそりゃ（笑）」

大介「なあ、興奮して眠れないからさ、ゲームでもしようぜ。」

「おういいな。」

2人はゲームを始めた。弟たち2人も巻き込んで4人でWiisマブラをした。

朝、7時、大介たちは眠っていた。

職員が寝坊をしているので起こしに来ると、いつきが、汗をかき、うなされている。

いつきは夢を見ていた。親父にぶたれボコボコにされ、包丁を取り出し威嚇する。だが親父はゴルフクラブで、いつきを殴る。包丁を取り上げる。殴ったり蹴ったりを続ける。

夢から覚める、いつきは職員顔を見て、ほっと胸を撫で下ろした。

<食卓にて>食事前、シンが、いつきに対して謝る。

それを見た大介は、いつきと顔を見て、いつきも大介を見て、こっそり笑った。

そして、その食卓を天井に設置された隠しされた監視カメラが撮影していた。

日は流れ、平和が続いたある日。

日次沢小学校で1時間目のチャイムが鳴る。

運動場にて大きなダンプが入って来る。

ダンプは核爆弾を積んで校門の中に入って来る。運動場のど真ん中にて停車し、一人の男が現れる。

白いフード全身にマトイ。ワイヤレス式のマイクを装着しステッキの様なもので体を支えている。

体の動きはぎこちない。

男は口を動かす。

校内放送が響渡る。

「あー、あーあ、うんうん。皆さん、聞こえますカー、聞こえますカー、、（ノイズじりじり音）」

「あ、聞こえてますね。大丈夫みたいだね。じゃあ、とりあえず本題に入る前に、皆さん、良く聞いてください。私は神の使いの者であります。今日、こちらの日次沢小学校に参りましたのは、神からの試練を皆さんに受けて頂きたく思ったからであります。窓の外を見てください。大きなダンプの上に何か見えますね。これは爆弾です。核兵器と呼ばれるものであります。これが、どんなものかご存知ですか？ これは・・・」

神の使いは、核について、うんちくを語る

そこへ先生がやってきて止めに入り、ステッキに見せかけた銃で撃たれる。

もがき苦しむ先生。犯人に命乞いをする。

倒れた先生に、無言でナイフを取り出して止めを刺す。

教室騒然、先生絶命後。

大介は犯人を見るが顔は見えない。口元が少し笑顔になった感じしか見えない。

犯人は気をとりなおして校舎に話しかける。

犯人「何処まで話したか判らなくなっちゃった。まあいいや・・・、核について知らないヒトは後で先生にでも聞いてください。それでは本題に入ります。皆さんは学園から一步も外に出ないで下さい。もし、一人でも出れば、爆弾を爆発させるので、皆さんが死ぬ事になるでしょう」

犯人は上記の台詞を言いながら殺した先生の名札プレートを確認する。

「ここで横たわってる・・・山本先生の様だね」と念を押す様に

犯人「でも、大丈夫。安心してしてください。しばらくの辛抱する事です。皆さんが神の試練を受けて見事達成された暁には、爆弾も解除され、将来の平和が約束されます。

試練の内容は、とりあえず、警察方が来るまで待ち、皆さんに伝えたいと思います。それまでは教室でおとなしく、先生の授業を受けていく下さい。」

大介は運動場を見つめたまま言葉でない。

< 教室あれくる。警察が来る。マスコミが来る。 >

警察が、犯人を運動場で囲い包囲する。

交渉人は説得を開始する。

爆弾が本物であるかどうかを問われる。

一切、犯人は聞いていない様子で「やかましい！」と怒鳴りさえぎる。

犯人「そんなに本物か知りたいなら、証拠を見せてあげる。北半球にあるロシアの山間部、座標1831、183に、衛星を合わせて見る。そこでもう一つの核を起爆させる。」

皆が驚く

「安心しろ。その周囲に人は存在しない。雪原と荒野しかないし、

動物だつていやしない。用意ができるまで、待つてやるから早くしろ」

警察は軍上層部に掛け合い、やってもらう。

犯人は、それを確認すると、運動場の外にあるワゴン車に向かつて手を振る。

そして爆発、ポリス一同は核の存在を本物と認定する。

「これで判つただろう。この爆弾も本物であるという訳だ。だから、したがって貰おう。言う事をしっかり聞いてもらわないこちらとしても困るのでな。あと、私には手を出さないほうがいい。私の仲間たちが、私を監視しているのでな。私の身にもし、何かあれば、仲間が遠隔操作でこの爆弾は起爆されてしまうだろう。」

警官は説得を続ける。「こんな事はしても意味が無い、そもそも君達が試練をする目的は何なのだ？」

「目的？ それは神に選ばれなかったお前たちは知らなくていいことだ。では試練をはじめよう。まずは、学園に居る子供2人をここに連れてきて貰おう。それと取材陣とカメラマンを連れて来い。私を全世界に向けて報道できる様に手配しろ。」

警察は無理だと言っけれど、

「判っているのか？お前たちに選択の余地はない。誰でもいいからさらつてつれて来るんだ。」

警官は子供は無理だと言つ。何をするのか教えてくれないと駄目だと、

「やはり、かたくなに拒むか。 だったら、お前は用済みだ。死ね。

警官は撃たれる。

「1分以内に生徒を連れてこないと、他の人も殺すよ。」

教室にて軍人が解説をし始める。無理やり無作為に子供を屈強な兵士がさらい。泣きながら2人の少年が神の使いの元に連れて行かれる。怯える2人。教室の全てのが運動場にくぎ付けとなる

犯人「さあ、そのカメラ、2人を撮影しろ。しっかり映像に残せ。

┌

運動場入り口で入れないでいたカメラマン達を呼び寄せる

「先に忠告しておくが、テレビ局の放送をカットをしようなんて考えるんじゃないぞ。もし、しよつものなら、その瞬間仲間が気付いて、起爆するからね。」

「では試練をはじめよう。」  
犯人は2つの銃を取り出し、少年の元へと投げた

「殺しあえ！」

「安心しなさい。生き残った方は、ここから出られるから。大丈夫、もし出来ないなら、私が君たち2人を殺してあげるから一緒に天国に逝ける。何も心配しなくてもいい。さあ、やるんだ。」

子供たちは色々悩み、一人が相手に銃向け、引き金を引こうとする。でも、もう一人の少年は泣き崩れているだけで、戦う気など無い。

少年は、大声で張り上げながら、犯人に向ける。銃声が鳴る。。  
だが倒れたのは少年。犯人は杖の隠し武器を使い殺した。

「さあ、報道の方、この死体の様子をしっかりと撮影しなさい。」

躊躇する報道陣に向けて銃を向ける

報道は仕方なく撮影を始める。

「もう十分だ。次は、その泣いてる少年を撮影しなさい」

撮影している間に、犯人は少年に歩み寄り銃を放った。

「もう、判ったと思うけれど、この少年は助けられません。私が提示したのは、あくまで殺し合いですから、それが達成されない限り、生きてここを出られないのです。」

「さあ、続きを再開しましょう。2人を連れきてください。」

新たに来た2人は怯えながら、でも、相手に向かって発砲した。

倒れる男子。

犯人は倒れた男子に向かって脳天を銃で打ち抜いた。  
ため息をつきながら言う

「血のりでしょうこれ？ 余りにも古典的だなよね。 まあ、いいけど・・・、みなさーん。今度から、これしたらペナルティとして30人程、ここに呼びますからね。 わかったー？

その後、子供たちは泣くばかりで、争いにさえならない。その都度犯人が子供殺してしまう。4人目が命を無くした所で、殺し合いが始まる。選ばれた子供は命乞いするか殺されるかである。けれど、涙ながらに謝りながらの殺す。

その後、犯人が自ら殺したりと、交互に続き、20人目の参加者で無感情で殺した少年が居た。

犯人「君は皆と少し違うね。どうして躊躇しなかったか聞いてみていいかな？」

少年「判らない。考える時間があったからかな。あるいは生きたいからだけなのかも。やらなければ殺される訳だし……」

犯人は無言でその少年が校門を出て行くのを見届けた。

その後も殺し合いは続き、33人目の時、殺したあと少年が笑う。

「君も皆とは違うね。どうして笑っているの？」

「俺、こいつ憎かったんだよね。ずっと殺したいと思ってた。俺のこと虐めてたし……」

「先生は助けてくれなかったの？」

「役にたたないね。見てみぬ振だし、クラスの皆も俺が虐められてるの見てみぬ、だからね。」

「そりゃあ、可愛そうだね」

「そうだ！ 俺は可愛そうだ。この先、人殺しの汚名を着せられて生きなきゃ成らないからな。」

「大丈夫だよ。君は悪くない。悪いのは君に殺しをさせた、この私だからだ。」

「・・・そうか。言われてみればその通りだな。ありがとう。テロリストさん」

少年は足は軽く、運動場を後にする。

次は兄弟。

「あの、俺たち兄弟なんですけど・・・」

「決まりごとだ。皆しているのだから、君たちも殺しあわなければならぬ」

弟は泣き崩れている。迷った拳銃、兄は大声で叫びながら弟に銃を無理やり持たせて、弟の指を使い間接的に引き金を引き、自殺する。2人は折り重なる様にその場に倒れた

「「じつじつやり方はね・・・だ　　　め！」

犯人は、残された弟の頭もぶち抜いた。

そこで3時間目のチャイムが学園に鳴り響いた。

そのチャイムの後、犯人の行動が止まる。  
考え事をするように、腕を組む。

犯人は突然、胸からファイルを取り出して見ている。  
内容は、生徒の顔写真と家族写真と名前が書かれたデータベース  
の様なもの

「では、これから名前を読み上げられた者と、その家族を、ここへ連れて来て下さい。まず、〳〵年組みの赤城まもる君とその親御さんをココへ連れて来て下さい。これまでと同じように皆で殺し合いをしてもらいます。」

戸惑う警察官に銃を向ける。

「早く始めないと、爆発させるよ。こちらは核から避難しようとして逃げる者を見逃してやってるんだ。これでも情けをかけて譲歩してやってるんだ。だからさっさと、家族を連れて来い。でなければ直ぐにでも爆発させる！」

次から次へと、家族が犠牲になる。  
どうしても親を撃てないが殆どであり、撃てたのは一人だけ  
それも精神が錯乱したい状態。

その中に、家族が来ない子供が居た。

「おかしいな。親御さんはこの大変な時にどうしたというのだ。わ  
が子を子供を助けるチャンスを与えられているのに・・・」

泣いてる少年

「じゃあ、仕方ない君は死ぬしかない。

4時間目のチャイムがなる。

「ちよいどいい区切りですね。では午前の試練は、これでおしま  
い。少し休憩をしたいと思います。皆さん、お腹へったでしょう。  
沢山の方がお亡くなりになられたので、勿体無いので給食を食べま  
しょう。それから予め午後の試練は自殺となります。それから・・・  
、これが最後の試練となります。この試練は生贄として学園から1  
3人の子供の命を捧げて戴きます。生贄に立候補した方は私の元を  
へ来て自殺してください。これは軍人さんが強制して無理やりに  
連れてきてはいけませんので、あしからず、もし1時までには13人  
が集まっていないなら強制的に核を爆発し全ての人間が犠牲となっ  
て貰います。では、あなた達の勇気を存分に世界に見せ付けてくだ

さい。

犯人は一人運動場にて給食を食べている。

教室では議論しくじ引きが行われる。しかし、どのやつても子供は泣き崩れるばかりで集まらない。

だが大介は名乗りを上げた。彼にとっては施設そのものは家族、30人も大切な人が居る。そして、いつきもつられて名乗りをあげた施設が助けてくれなければ彼もまた殺されていて生きてはいなかったからだ。

その意見を2人は、校内放送を使って主張した。

「犯人の言うように、このまま何もしなくても全ての人が死ぬ。勇気を示してヒーローに俺は成りたい。俺は皆が大切だ。」

この放送を聞いた直後、全ての人間の心が一つにまとまった。

沢山、立候補者が現れ、絞り込むのに手間がかかる。

6年生を代表した男13人の生贄が決まった。

そして13人は最後の晩餐として給食を食べた。

給食の内容はカレーであった。

大介は、それを喜び、これでもかというくらい、たらふく食べた。

そして生贄13人は犯人の前にて自殺した。

けれど、駄目だった。

一人死に、2人目の死を目の当たりにした時、決心が揺らいだ。

引き金が引けずに11人が止まってしまった。

大介も手が止まった。

犯人は起爆をちらつかせる。

10カウントダウンを始めた。

11人は頑張るができない。

大介は皆で同時に死のうと言い聞かせるが・・・できない。

それを見た犯人は言った。

「君達は合格」

犯人は子供達をダンプの二台に乗せて走りだした。

そのまま運転している。

警察たちは彼らの後を追いかける。

大きなビルで車を止める

犯人は困惑する子供達をある一室の扉をあけて、中に招き入れる。

警官は内部をスコープで監視するが見えない。

数時間経っても何も進展しない。

警官が煮えきらず突入すると、その部屋には犯人も子供も誰一人として存在していない。

あるのは何も裝飾もないコクリートの壁がむき出しているだけであつた・・・

## 世界の何処か

大介は今何処にいるのか判らない。  
だが暗闇の真っ只中に居る事は自覚している。  
暗闇の中で彼は声を聞いていた。

――声――

「まさか2人も死ぬ者が現れるとは思わなかった。これは誤算だが、ある意味で奇跡に遭遇したかの様で嬉しい。」

彼らの崇高な魂は輪廻をめぐる。だが、彼らは崇高すぎて私が必要とする仕事に役に立たないんだ。  
彼らの魂はいつの時代も誰かに・・・今回は私を含めた世界の踏み台になった。

あの二人は死ぬ事が宿命だった。

私に必要なのは死への恐怖を保持したまま、誰かの為に死ぬ葛藤が可能な者たちだ。

死への引き金を引けた者は葛藤が無かった。迷い等最初からなかったのだよ。

いつきという子は、児童施設に命を救われて世界に恩を感じていた。だから迷いが無い。

もう一人死んだ翔太という子も、恩を感じて生きていて己は生かされていと確信していた。だから同様に死ねた。

僕が求める葛藤エネルギーには無限性がある。

葛藤する自らのエネルギーで主は身滅ぼしていく。

自殺に至らなくても、その葛藤で自然消滅していく事が可能なんだ。  
君達にはそれができるから僕に必要とされた。

判るね。君達は僕の大切な道具だ。

お願いだから、今しばらくココで大人しくしていてくれ。

## わつくばらんじ

刑務所内は神の使いの犯罪により、大騒ぎとなっている。無所内に設置されたテレビの前に沢山の囚人が集まっている。

そこに、いつきに暴力を振るっていた父親が刑務所でテレビを見ている。

いつきが運動場にて自殺を遂げた瞬間を呆然と見ていた。

< いつきをボコボコにしていた自分を思い出す。 >

包丁で威嚇され、たじろぎゴルフクラブで威嚇したが刺そうとしてきて、思わずクラブ殴りつけて頭に出血を伴う怪我をさせた。

直後、近隣の住民に通報されたのか警察が到着。親父は逮捕された。

< >

親父はいつきの死体を見つめている。  
その顔の表情は判らない。

< いつきの母親 >

ホテルの一室、ラブホテル。ベットにて男が居る。

女はバスローブを身にまとい、テレビを真剣に見ている。

「い、いつき！」

画面にのめり込む様になっている。

自分にピストルを向けている、いつきに手を伸ばす。

「や、やめて、おねがいだから・・・」

女は首を左右に振り目に涙を浮かべてる。

銃声とともに、女の息が止まる。  
静寂が空間を包む。

彼女はテレビの前の崩れる。

<お姉ちゃん聡美>

学校前にてノートパソコンでテレビある

その周囲に人が集まり、聡美も居る。

皆で一斉に銃を口に当て、

犯人「ではカウント開始、5、4、3、2、1、

死ぬ瞬間、目を背ける。

画面内の音だけを聞こえるものの、彼女の耳には届いてない。

<一方不良のシン>

中学校でテレビを見てる

いつきの死体を見てニヤケル

><<映像的な物語の展開のやり方として、犯人が13人の生贄を  
発表し給食を食べ始めた直後から、カットし、いきなり運動場にて1  
3人が集まっているというところまで飛ぶ、その後、それに対する登  
場人物のリアクションを描写する>?

そして大介が思い出を回想して晚餐に何が起きたかをドラマ的に描写していく。

大介「ごめん。いつき・・・オレはお前を見殺しにしてみました。どうしたらオレの罪は償えるだろうか・・・」

<回想>

犯人の警告を聞いた後、の

政府の人校内放送にて「皆さん、本当に申し訳ない。私達はあの憎き悪魔に屈服するしかない。どうか勇気のある方、我々を助けるべく力を貸して頂きたい。

教室内にこの校内放送を聴いている者は居ない。  
皆、自分たちの事で精一杯、家族と電話を取り馴れ合い、泣き崩れしゃべれない者、しょんべんを漏らしていた者、様々

その中で、ある者が率先して行動を起こした。

「皆！ このままだと俺たち死ぬんだ。何もしなくても死んだ。誰かが犠牲にならなきゃ駄目なんだよ。泣いてる場合じゃない。俺らには選択肢が無いんだ・・・くじで決めよう。」

皆、否定しない。

彼は先生に、くじを作って貰う。

準備が出来た。

出席番号順に引いていく。

大介は、いつきと続き、助かる。

命が助かり喜ぶ者。

そしてババを引いて泣き崩れる者。

ババを引くものは、あたりを引いて笑顔になった者達を見て、まだ、くじを引いてない者をにらみ付ける。

表情、せつなげな、くやしさと恐怖と憎悪と、孤立している寂しさを複合したかの様な表情。

要するに、これから本気でうんこ食べなきゃならん様なプレッシャーを感じる表情である。

それを見かねてた大介は「オレが死ぬよ」

教室中が静まり返るり、大介を見る。

「実はオレ、物心付いた時から施設育ちなんだ。児童養護施設というやつ。知ってる人は知ってるだろうけど、あそこがオレにとつての家なんだよね。自分に親が居ないと知ったとき、凄くシヨックで自分が世界一不幸かと思った。けど、オレにはちゃんと親が居たんだよね。施設の料理作ってる叔母ちゃんとか、オレのママみたいなものだし、血は繋がってないけど。お姉ちゃんみたいなのも居るし弟みたいなのも居る。毎日顔合わしててある意味で家族みたいなものなんだ。友達が持つてる家族とかずつと憧れてたけれど、大切な人が居るという意味で同じじゃないかと思うのね。オレは死んでもあの場所が無くなるのは嫌だし、家族が爆弾の犠牲になるのも嫌なんだ。そんで良く考えてみたら、あの施設って皆のお陰であるんだよね。いろんな人が、それこそ沢山の人が協力して出来てて、そういう人たちのお陰で親にの居ないオレに家族できち

やってる。だから、オレは、皆に恩を返す為さ・・・死のうかなんて・・・それに犯人の言うように、このまま何もしなくても全ての人が死ぬ。・・・あんな奴に負けるのはゴメンだし、だったら勇気を示してヒーローに俺は成りたいと思う。俺は皆が大切だから、きつと死ねると思う」

いつき「だったら、オレも死のうじゃないか。俺だって同じ気持ちで居る。」

クラスで泣いて怖気づいてた同級生が徐々に泣き止む。

「だったら、俺だって、死ねるぞ。母ちゃんも父ちゃんも大事だし。

「オレだって。」

皆が大介といつきの元に集まりはじめる。

13人が集まったとき、死を選んだデブチン（通称ごはんライス）は言い出す。

ごはん「なあ、オレ腹すいたよ

空気読めない発言に皆が一斉に振り向く。

いつき「今日の献立、なんだっけ？

大介考え込んで思い出す「カレーだ！！

ごはん「おおおおお

一同「おおおおおおお

大介「なあ、こういう状況でこのノリって変じゃない？

いつき「そうだよな。

13人は一同笑う。

<昼食>

カレーをばくばく食う、ごはんライス。

それを横目で見て負けじと、いつきが食らいつき  
それを横目で見て大介が食らい付く

<犯人の視点>

ダンプの頭にて

犯人もカレーを食っている。

「ごちそうさま」とつぶやき。

ポケットテッチちゅを取り出し、吹き、ポイ捨て  
トレーを脇に置く。

「うまいな。これ、」

<校庭にて13人が犯人の前に並んでいる>

犯人はトラックの頭から降りて13人にそれぞれ、銃を手渡しして  
く。

犯人「さあ、死へのカウントダウンを始めるぞ

5

4

ど  
き  
ど  
き  
ー  
ん

1 2 3

## ちっくばらんに（後書き）

ここまで、書いたら、あと、想像でお任せで、

これ、映像化できたいいな

見せ場はやっぱり、生贄に立候補し、リーダーシップをとってしま  
った大介にある。

自分は恐怖で死ねず、いつきを見殺しにした罪の意識は相当のもで  
ある。

その罪を背負っても恐怖で死ねないのだから、それをどういう顔で  
演技するかは役者さんにとって凄く遣り甲斐がありそうだ。

細かいキャラを煮詰めて、後は深くしていただけだろうし、別にオ  
シがここから描かなくても、誰かにバトンタッチできそう。  
深く書き込む情熱は、そこまで無いし・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2618p/>

---

XXX小学校でテロ事件

2011年1月7日03時55分発行